

には自身は存ぜざれども人をたぶらかさむがために声をいだす。是は隨他意聲。自身の思を声にあらず事あり。されば意が声とあらはる。意は心法、声は色法。心より色をあらはす。又声を聞いて心を知る。色法が心法を顯也。色心不二なるがゆへに而二とあらはれて、仏の御意あらはれて法華の文字となれり。文字變て又仏の御意となる。されば法華經をよませ給はむ人は文字と思食事なかれ。すなはち仏の御意也。故天台釈云、「請を受けて説く時は只是れ教の意を説く。教の意は是れ仏意、仏意即ち是れ仏智なり。仏智至りて深し。是の故に三止四請す。此の如き艱難あり。余經に比するに余經は則ち易し」 文。此積の中に仏意と申は、色法ををさへて心法といふ積也。法華經を心法とさだめて、三十一相の木・繪の像に印すれば木・繪二像全体生身の仏也。草木成仏といへるは是也。故天台は「一色一香無非中道」と云云。妙樂是をうけて釈に、「然るに亦俱に色香中道を許せども、無情仏性は耳を感わし心を驚かす」云云。華嚴の澄觀が天台の一念三千をぬすんで華嚴にさしいれ、法華・華嚴ともに一念三千。但華嚴は頓頓さきなれば、法華は漸頓のちなれば、華嚴は根本さきをしぬれば、法華は枝葉等といふて、我理をえたりとおもへる意（山の如し。然りと雖も）一念三千の肝心、草木成仏を（知らざる）事妙樂のわらひ給へる事也。今の天台の学者等、我一念三千を得たりと思ふ。（然りと雖も）法華をもて或華嚴に同じ、或大日經に同ず。其義を論ずるに（澄觀の見を出でず。善無畏・不空に同ず。詮を以て之を謂わば）今の（木・繪二像を真言師を以て之を供養すれば実仏に非ずして権仏なり。権仏にも非ず）。形は（仏に似れども）意は本の非情草木也。又（本の非情の草木にも非ず）、魔也鬼也。真言師が邪義、印・真言と成